

二〇二二年三月二六日

枕木に敷く花屑やインクライン
被災地を走る聖火や花開く
春霖やインクラインを烟らせて
哲学の道いま花のトンネルに
飛び跳ねて園児らのゆく芽木の径
南禅寺花の三門くぐりけり
高欄や霞隠れに東山
花の雨しづかに更くる東山

二〇二二年三月二五日

閑ぎ合ふ光りと影や大桜
天井の龍がぎよろりと堂寒し
天井の龍が目を剥く春灯
指差す子見えているらし揚雲雀
コロナ禍を忘れて古都の桜狩
華やげる老いの住み家の赤目垣
手作りの餡のはみ出るよもぎ餅
娘の帽子遥か先ゆく春山路
追ひつけばまた離されて春山路

二〇二二年三月二四日

大橋の対岸消ゆる大霞
火床より古都を一望芽木の風
あたたかや博多訛りの孫娘
春塵や阿形の仁王白眼剥き
家形の埴輪の窓に春の塵
風意地悪きな粉飛ばされ草だんご
足弱の杖ともなりて春山路
墓碑の脇引かずに残す土筆かな

たか子
あられ
明日香
せいじ
あひる
たか子
もとこ
凡士

みきお
明日香
ぼんこ
素秀
たか子
菜々
そうけい
あひる
あひる

素秀
せいじ
もとこ
たか子
凡士
あひる
せいじ
こすもす

二〇二二年三月二三日

トロ箱にパンジー笑ふ港町
鉄橋は弁柄色や花堤
桜坂越えて展けし紀伊の海
浜宿の庭いつばいに若布干す
おのころの海峡またぐ橋朧

二〇二二年三月二二日

笑ふ山ロープウェイでひとツ飛び
春空にノンちゃんのあるやうな雲
蒲公英の絮乗り込んでをる電車
コロナ禍やテレワークなる春炬燵
落椿卓の器に浮かべけり
揚げひばりそこから淀の見ゆるかと
春陰や夫の名なぞる共同墓

二〇二二年三月二二日

風紋に漣立ちて菖蒲の芽
学び舎の子ら待つ窓辺風信子
ミサの鐘くぐもりとどく春の雨
北窓を開けば飛驒の風通ふ
大空と海の溶け合ふ春霞

二〇二二年三月二〇日

釈迦像は俯向き加減春ぼこり
咲き満ちて小米花の名偽らず
ひと筆の墨痕光る春灯下
卒業の窓に洩れくる児の返事

智恵子
せいじ
素秀
なつき
凡士

はく子
凡士
せいじ
ぼんこ
はく子
むべ

ぼんこ
智恵子
はく子
凡士
ぼんこ
たか子
そうけい
せいじ
豊実

毎日句会みのある選・二〇二二年三月二八日